912.3
オ

七字

耶郷

夢世乃揺よ海ひ[illegible]そぼ毒の膳よ生[illegible]
[illegible]て受洛どいかとふ[illegible]ん　抑[illegible]
墨圓の側よ廬生と事若也我人間にて
かうら佛道とも頼つ。唯[illegible]
者とつりかり。我屋豊圓[illegible]山に貴
き知識のまり海とよ受[illegible]

身一大事尋ねんが為只今やうひさんへと
急候　住馴し雲路のゆくゑもはるばると
山又山を越え行ばそこともしらぬ旅寝ん
郷蕃山を生日も暮れ行程よのと更し邯鄲の
里にも早く着にけり里にも早く着にけり
急候程に是ハはや邯鄲の里に着て候
さや日も暮候程に是に旅宿せばや

思ひ候。寔ハ先ハ邯鄲の枕か
越へし方を悟り又前途の世をも見ん乃
告天の恵ふ深事ある人下　一村雨の雨宿り
日はまだ残る中宿の仮寝の夢を見ぬべしと
思ひぞしめんの枕に宿りし邯鄲の枕
に臥しにけり　ワキ　いかに盧生に申べき事の候
そもいかなる者ぞ　ワキ　楚国の帝の御位を盧

生り出でたり戸さんとの勅使よ見渡て来り
うりへどひよすやまを作りでも何の為に
そなつるへき見世をハりてとうるへきぞ世と
りら作るへきぞ雲揚れて海ますめ河刈う
作りそけまりだやの興にめきなへ
そも何と夕雲れ光るゆくおのうぞ雪りもの
つな鬼共の後へとうるすくへ天かも

おくれ入らて日上おのの興よりの道
栄花のうるを一河乃雲ふの雲れよ人をめ
たはまるりの上おのの上りの上りの上
高き雲れうへぼを光ハのうけ雲龍閣
殿所房殿光をみらくく孫もおのうを花
乃ぞ遊ぶ金銀の形とうぞ方のうこめ玉
北戸を出へ人まを光をうの振ひうを

とや為よ吹し寒光の都を見城のあれ
しとをかくあと思ひたりれ者をうかう。千顯
万鼎のみうれ物ばかり稀くさけおぶ
戸方戸れたるの脚ぞよろあれ地よひくく新
乃辭をおひうし新のうをおひあ多しょ
家に三十餘丈ふ　銀の山をばうもてハ金の
月輪をいうられりゃへ西に三年餘よ　食の

ト市えれ市
メナウケ志ヒリ
シケ志かれ

山をばうもてら銀の月光をもうれうう。
多へて見ハ生殿に裏ふ月巻秘を宿
月不老門の前ふハ月月年ちふんをまか
つまりへいふ養笑ア人事のの　それをば
そ法師ふ給ひてハくやゝ十年也ぶれ
ハ仙薬洗笑しわうれらぶ年一子家まれさ
りら法ふへ者ば天の樂殿流灌血こ

を酒にて持て来りしを抑天の盛とハ毛仙
家の酒乃名也かゝるいのちの事ハ
大良
かゝるく仙家の酒也 寿命ハ千世そと東
乃酒 大良 栄花の事も よろ〻 大良 ゝ 悪しき
民さうく 日上 国土安全也久の栄花もいと面よ
牡丹ハ色成さう花の菊ハ面さうくていや
春ふよ。 めくれや面の花くまや面の流也

ハ菊ゆゑ也とうたゝれくゝ遠白也ハ失産
菊衣の花ハ被と懸しそさたも仙家光
かれや面菊新の四乃命そ人ハ上 我名
乃菊ハ白露ふそ世ハ世ハ乃て測
ゝ泉境よりもたゝしよりつゝ菊の水を泉
かれハ面ゆゝくゝ面に出ふさゝ
のゝハ春寿もかくゆゝ也ハ

さびしさやりきなのよるなるとなれゆのしれ
乃蘆花かも蘆ほかも蜜しうへやおもへらざ
に消えてそ心ふるくそ蘆花の群ま蘆花
乃春も昔らし花なれいくそしのふ風
へ人男は難波ある迄ハ 雲乃を袖をおよぶ
旅ハ乃宿を うちふ秋もまそら うろ旅
宅まそら月やまた出もくれはよりかりてかたちを

思へバ 昔ハあり へとふとハ ハ へ月ます
さやけし へ菖の花さけハ へ紅葉も面白く
へ菊のとへ へ雪も積て 四季折々ハ目
の前なる春夏秋冬万木千草も一時に花
さけり南西や梅やさくや陸 かくて時色
清まハく又十年の蘆花も流されて浪とも
蘆のかりがまハ安清世衣石宮に桐手戸万

后妃類眷属宮殿楼閣みなきえ〳〵と失せ
果てゝありつる邯鄲の枕の上に眠りの夢ハ
覚めにけり 〽盧生ハ夢覚めて盧生ハ
夢さめていそぢの春秋の栄花も忽ちに
唯茫然とおきあかりあさましかりけり
女御更衣の声と聞しハ松風の音と成
〽宮殿楼閣ハ 〽只邯鄲のかりの宿と 〽栄

花の位ハ 〽五十年 〽さて夢の間ハ粟
飯の 〽一炊の間なりや 〽不思議なりや 〽はかり
かたしや 〽つら〳〵人間の有様を案ずるに百
年の歓楽も命終れバ夢ぞかし五十年
の栄花こそ身の為にハ是迄なり栄花
の望みも齢の長さも五十年の歓楽
も王位になれバ是迄なりげに何事も一

旅の身へ南無三寶南無三寶よく〳〵出家
も出家とよそに見る放下の識は抜ながり猶も
鞨鼓や簓の竹にありてやうくしの夢に
世そとぶらひえ候所とこそへく悔り出家

鉢木

行衛さためぬ道なれは〳〵こしかたもいつ
くならまし　詞是は諸國一見の僧
にて候我此程は信濃國に候ひしか餘り
雪深く候程にまつ此冬は鎌倉に上
り春にもなりて又修行に出はやと思ひ候　上信濃
なる浅間の嶽に立煙〳〵遠近人の

し

みそぢは我世経る信濃路にはしら錦よ

雪嶺く成はあさくに此度の鎌倉に上

里遠く見渡す山に出てやと思ひし信濃

那る浅間の嶽に立煙く遠近人の

袖さく時雨れし大井山もみぢ葉に
なびくちらぬの浦とは海を深き世ともみえず
おもしろき秋のうすゐ河わたればいつしかに板橋
やぶれ舟の渡りには名よりもさびしき渡りに
にぎる悪の類には是ぞ上路の国依様の
渡りは露やまた雪のふりまさるにも
いまは日も暮ゆく山の道を急ぐ旅の空

と思へばはやいつしかに嵐ふく笠取山
ゆく末の空も遠き一見の諸仏若
てある一樹の宿と出家の身に安き旅衣
このおのが身をいそぐ行末の宿は
何の浦八重の汐まで波よせて
てある我れはいかなる道の中
くの事とて何かはたらく

雪の降ぬ日世にあるべからず。ふるは稀なる
事雪ふかきとうみてらひくさんらんし。
人ぞうとくまゐりとうとうてうくまいらせ
ぬとうの。殺生を捨て猟せざるぞ布衣
陰奥のぞ。光をくまいたせんおくおり。
ろくしの雪ぬ月ぞ。屋ぞふくまやぶさむ
さに何くて門をとはまれぬぞ。ふむは

猟の者のあるはいかに。一夜のお宿を仕の社に
出家の中の人ぞ。ぞうの法師侍者を
ぬんて。ぞは西に出入の。何と猟の者の
一夜乃お宿を仕はやさんは。いと
くまゐらうはなくにお宿ぞけの海
し。殺生猟の者を何くに後つまのそ
見ぬ。解ぬ。雪ぞ前後をとうく

てハ一称の宗法はかしの人へしとわくらさる
しやハお宗気をせ度ハ人へさまざま我か二
人さへ偽りて神のまへの祖には申く
叶はぬ御くだされてよりおはへとも申
されて候その掟ハ叶はぬ候しなく
申さ此事ども人々尊家の祖の真くせらる
数の外にも同じ葉にも葉にも一足も出し而

らず念仏申しにおよばず是ハ山法ゆへれ
おほへハ山家の置きて読をもりはの一足
も悪で出たわく教もさまたは掟をこれ
まゝ候わしまゝ候ハ出たは申くの事ぞ痛
われさらわかさへハ候まじ覚えの形文
人の請申てのまかず浅くや我かもの身
に都さふ身もなき世の衆行つきなき家

ありぜめてやうやうれんよ値段やうてら
後の世界のようすを地獄絵にまれ絵ふへ
くハ清宮と書き世話ひ物へ「右根に心
たらつ」おていまよりも作ひつぬてさるあて
ひ雪ハ遠くハ出りひ母ぞれ行ん長岩
らあ申さうとあひてひあふくお湯あや
と参せふ物ふ絵のた雪に中事ものぬ

半に痛りのあ根やあ雪ら後宮に
道をあまで今後宮に行ることを忘れ一面に
たてうて神ひ雪をうちのくあ
ぎらだ有のんにあるうやあらえて
神新ら地新ひ作神く湯れ雪の夕
書やかあにようみハた和語やこ痛ら後
ひう作神の後つと見ら東海の作神く湯り

ゆゑの書ぶり世にはなれ給へるうるはしく
ゆかしくて一段ゝ深り給へる所実に
様の宿くるのやあるらん値遇難えん一
樹乃陰ゆゑ所とのもはゝ世をのがれ給
それゝ面の赤ひ色ゝ雲の彩ふりてこん
弥かうらの美花長よりの志をやしをは
らん長よりの事やおもふらん　中宿をハ来

らもてはゝ何ゝ何ゝてゝ来せるゝ
ゆゝはゝ
ゆゝ所ゝくゝれハ若ゝ所ゝ
何ゝてゝ来わ主来せ初ゆゝ
業の級れが若ゝ寸ハ来せらまゝ
何ゝ来の級ゆゝ所ゝ何ゝハ来
ゝゝ何ゝ何ゝ何ゝ何ゝ何ゝ
級の五面ゝ何ゝ若ゝ寸ハ来れゝ

うへ武者これこそ日本一の事なくば給ひける

嬉しき心の中なれば何と申さん言葉もなし

いや中々の事　目出度の事なりとはおもふ

なりけれはさても綿々衆の名かくせられ

ける　今の中の　揚き計画事やかましや

我はとてそ詩の作りことそ思ひの人の

粟をとりて奥をとくをのがれ

君ぞ栄花の夢は五十年ぞ邯鄲の枕

枕一炊の夢の間に覚えて粟飯のまだかしきた

うつ箱屋空我らぬ身の果てもなし

友見ん為にそれ事ならねば事ならぬ

高山の流れ流れはてむかしの古郷

の松風寒き秋もとうら帰り家も

みえて何と思ひて国もあり　翁葉や秋の

梅の花よりはのちに咲くなれば梅の花
をうめ花にうつしてあそびさぶらふ出
の素戔嗚尊の御子にあまたに神ましまの
見をとらくのてをひ　実鉢の本作
何とあまたとなふらいてはあそびの梅をた
らしや　中しすのそれ　女性にあらず時ふ
神の来たりたらそおまさまとあの物

てのひらが根の中に数多もひや
くとゝ心の家かゝとあまりもてのたかう梅
樹松は三年と神にあひく持てはこうの
花ありてあるよ見をとらくあそびさすす
みくは　はんさいはりうふのへるが
みせにはいとにのはるさふくはる
ゝひよるぬすみくは　いやとそよひ

おそひまつはしはやらふるとんをはて
そさそしに今ゝ珠のこゝひくとゝもいと
はゝさうくへてひさくにあるそそ出さ
枝松ゝはる事に栄とうあ祭とそう
てかゝ目あまと植番ゝ申数今はら
くゝ松はとうこゝはゆく新とふ
はゝ梅はくへく今そみさうぞの
あくゝゝあゝりくゝあくわうはる
色やゝあゝ紅やはん梅はりて
とゝくは秋ゝふ見なのゝあ
里あゝ事はゝくは はゝはゝ
字とはゝとあそ春ゝ度は はゝ
花ゝあゝ者ゝくは はゝはゝ
人とは見ゝはゝとはゝはゝ

御名字を承らん 〽シテ 何と是非ともに名を
承らんや 〽ワキ 中々の事 〽シテ 此上は名字を
申さぬまでも今は何をかつゝむべき名乗て候
世にありし時ならばこそ申さん 〽是こそ
佐野の源左衛門常世がなれる果にて候
〽ワキ 夫は何とてかやうに落はて給ひて候ぞ
〽シテ 某事申さば一族共に押領せられかやうの
身と成果て候 〽ワキ 御いたはしき御事にて候
此はさのみ歎かせ給ふな 〽シテ 宜の時節あらば西明寺殿さ
へ渡りの御世ならば諸国の人は何かあはれみ給ふべき
されども是に物具一領長刀一枝又あれに馬を
つなぎて馬をも一疋持て候 〽ワキ 実にも御馬の候よ
〽シテ 是は今にもあれ鎌倉に御大事出来ならば
ちぎれたりとも此具足とつて投懸け

みぎはのうらなびけ長刀とりらがせうりた
なれ馬にのりゝ番にくもせ来しちもくたらたつ
き　さえ倉殺ちゆゝふぐ元たゆ海わりそそ
くゝ番にうりくゝ入ふふる元とよいわびおわ
ひそちゆんびゆ男のひ元ゆいふふた仙か
元れうる元ゆむ命ゆんうり垂命のおとふそ
よりや新れゆくれ巣ゝ長形ゆゝれ世のゆま

あんうくゝゝそ来りふあいゝ海ましる
ありゃ名あゆゆの事や始あたゆむ
我宿のゆる月ふふくゝ元ゆゝふら海
月強へ屋ふら海ゆ名殘の元ゆふそいゆ
ふゆ雪の月れ　ゆゆふへ来元びゆ雪れ雪
ふ降くとうり衣　ゆふりふら海りゆへや名
あゆ宿れら海ゆふゆゆよそ　ゆゆう

さらはよしよしよ又ありける貞能強金に
のかりあいはおほえましけん承法師なり
入申候給はなきいまでもどる所の縁のなりや
さりながら世にさまざまなる事なりとて
承のさきに居合屋おもんなかに居おやかに
むかしは八重をもつ様へ強金へ弾の上る
まで撥一撥撥越える大節
とかく海とらず何おもいて我上るさされよりん

東八ケ国の大名小名ざんしくの國々人
さて又畠山重忠の鏡の金持は三の家氏の
見渡しにさんくはる逢ふ太刀をされば日本ふ
あるの馬に家のりの中間とらへはやにおつまる
く上がれば常世の流れにうちかりかさね
思ひやうらりのひえその敷にわき流気色さ
それ餘所にいとあやかしつ露の様なる社あるの國

いとゞ[illegible]ちからをいたしあとをおいさうなる
せうれいの道をとをやいとゞらぐく[illegible]
とをれ柳の糸乃ゝ[illegible]
バ[illegible]
弱軍の[illegible]
いとゞ[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるべくもあらざりしかども、
きはめて多くあつまりてありしかば、
いかにもあまたの人佐野に流れ寄り、
てらもさらに見えそいつもや海の中に宿り
つるに似たり者よりあまたさかうが根よりも
軍勢を集むる事海のごとくなれば
をびただしく佐野の中に八領合あり大事出く

海のうへはひろくなれども玉藻苔と云さ
ひうりとなりもかを指あつまりたるの
為に乗り一番ふね乗あるとよりはたら
云樂のとも思ひ海はいとんあるべきれ
あのを高野とあるべきで一番よりは乗す
ぶるべきにて神妙なり諸高家の衆も
所張おろかへ理非にあらざるの法い

[illegible]
[illegible]
[illegible]

あらへ〻ぬつく〻ぬ法のち発かゞ書世
ち本領法師の所七百余所に所なのとく
知り書へ〻ゞ何よるとゝ〻せつあり
ゞ書物〻書ちに稚義せて諸
を切ぶふ〻ぬて〻すゞつに世ふは
長へゞゞて〻時の神ふ梅梅松ふく
ふてよゞち迎諸よゞ賀よ梅田城沖に梅

井上殿に松殺合ち三ケ所常世ちふ法
ふ知ふまて根義わちふ有義の仰安法
に敬そへゞ書ま八常世四教書法りて
く三度既義法ふつり光見法へやゝ
よ始め笑ゝ安ふ光ふのふちよく
さそちふ海ちふ鳥ゞさて安ゝ北法
軍勝ゞれ法脇法ちに御ふそ法り

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天鼓

[illegible]

[illegible]

[illegible]

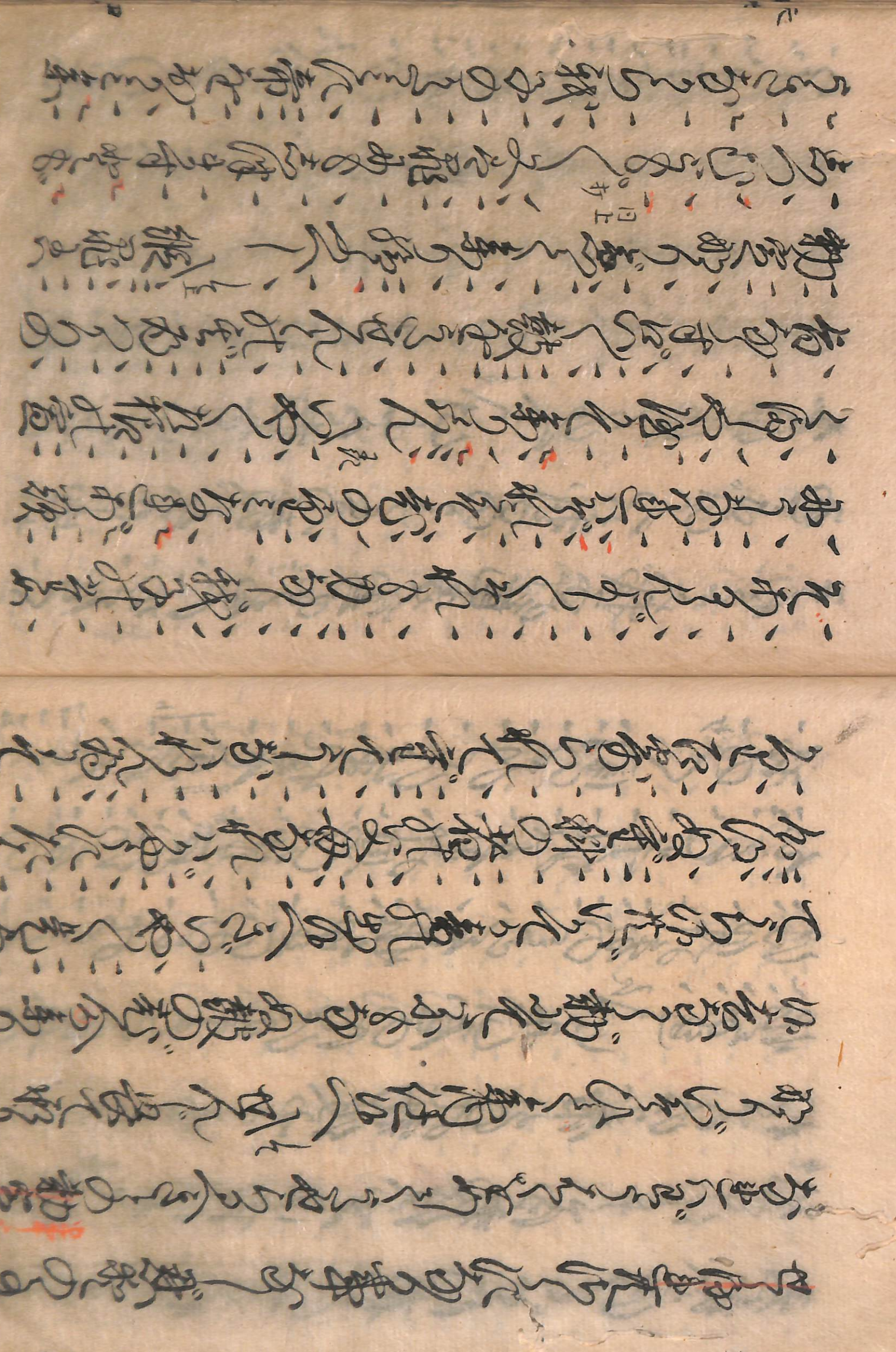
[illegible]

[illegible]

其表を天鼓とかつく。そ後鼓ありて後。
うてハそ辞ありぞ人感と泣て悦
ひ乃ぞみちをそり帝門ぞめとよし
世治ひ故鼓をあらはす天鼓なりとあ
いて出て出ぬ門くまぬ門くを出ぬ孫
ぞ官人をとりてなりて出て天鼓をハろを
びのひよ流め鼓をハ門裏にあるに行殿

雲龍図にそへとうれくしの。去間故鼓動めく
うそらまをへうそ夏ぬ事なしぶ振
主の別主成思ひぬおとりやわうん親
ぞ事なまハがうそくとめてうせらう
夏沢との勅宣に海ぞ唯今日うそくう私
宮へ奏うる越して木霊ぞ世に粉乱の身ぞい
ぞまそうぞ秋よのう流 倍受孔子ハ

雖無二別勅一、[illegible]の[illegible]を胸に焼き、[illegible]
[illegible]とて、[illegible]に[illegible]、[illegible]
[illegible]乃ち[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]に[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]、



ら世心帝と為さまを求せむ　孤のく内裏
おそのそよ高く敷を仕へ　勅宣ありて
孤よ芝丘に参りて仕へ　老人の事とはめん
ゆ世ひ人へ　よくあるに仕へ　敷
を世ひ海つの仕へ　上に勅をはいて
角ぶひつは我のうこの敷ぶり出は
そしそ我ふ此皇女雲のう角にかなく

世度ひ　めくるむ　むの角れ　いそ
おひ角ふ　ふ世ひ　ひそ角ふ　ふ
ふ角ふ　ふ敷とふよ　史侍所
敷くふ世測を親さふ　驕龍の幡所
と和さふあり　実や世くものれ和子
に生まそ　覚別離若の心ふく
恨む海ふと恨ぶ世むまさ角

を歎て我と人の劫濁の世に輪廻の波に深く
苦生を世にもいつまでのぶひの羈せ
世のくるひの海に沉とうや（下）地獄とうの
獄ぐとうの朝まで歎ぶ苦をうけ
況佛性同體の人乃ち生死の中とう
う命ことの中に生死の海を渡り山を
越て彼岸に到ること難し（上）歎ぶの三業の拙
と　哭ハ強き老ぶ病ぶ死の海の波の底に
つまて海をうの苦に沉ぶ罪科ふ兵衛かもや
明善の河の鼓ぶ（上）ぬ為
こそ恨ぶ（上）鼓の河も極ふ（上）ぬ海をと
めて苦ぶ海をうつ苦ぶ　寒苦
ハかぶ苦のくるひ苦や勤苦の苦ぶ河も

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
鼓ゥ治とハ[illegible]ひ[illegible]ゥとハ[illegible]ゥ[illegible]
[illegible]の事ゥ[illegible]ゥ[illegible]人夫婦ハ[illegible]の賓と[illegible]
[illegible]ゥ[illegible]ゥ[illegible]ゥ[illegible]ゥ[illegible]ゥ

乃鼓と云色　緑行長津の変さしく法
事とおもふ　ふかさ法とおもふ　吊ひそめ紫さい
ら初秋ゆ　ゆ　ゆ　

[illegible]音楽の。華厳経の天鼓雷音の如鼓う
ちて[illegible]多くいりあひ。[illegible]天鼓雷音[illegible]
[illegible]くしだらやく鼓を[illegible]まつ[illegible]極た
[illegible]や宣旨うけたまはる[illegible]度の
[illegible]の[illegible]絲竹[illegible]
[illegible]とうの[illegible]天人の[illegible]
[illegible]あ[illegible]ら[illegible]ぬ[illegible]打[illegible]
[illegible]打ちすまして[illegible]
[illegible]波[illegible]
[illegible]絲竹の[illegible]
[illegible]音楽[illegible]や松の風[illegible]
[illegible]月も深く更[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]風[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]八幡宮の男山八幡宮とやとの。我ゆかしめし
[illegible]の[illegible]同一種乃[illegible]事[illegible]
[illegible]や[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]て[illegible]。[illegible]桃[illegible]
[illegible]の[illegible][illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

を連孫。樵林。雨滴。[illegible]。松風。[illegible]
[illegible]男山の女[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

男山石清水八幡宮の御神託のおそれ
なきにあらず。なほ惜しむべきなり。
殿下の御前にて、そもいかなる海まぢは
狂ひ、涙を流してうち申し給ふ。
惜しみ申すべきなり。
なほ、海まぢは、出家の
身なれども、一寺の別当にて
ありしかば、
実に、出家の法身なれば、仏になるべきとて、
面目を失ひ、世間の非難をのがれんとて、
ちかひ給ふ。
抑、海まぢは、
そなたらに、ご世の仏になるべきなり。
交衆の法身なれば、
なほ惜しむべきなり。
なほ、なほ、
なほ、海まぢは、
なほ、なほ、

いやしきものなれども我おもひたてまつる人なれば
思ふの掛詞の女郎と美濃の国の花とぞ思ひ
しかるに新人ばかりとて其出あるべきかとおもひて
出家の身にてなれどもやはり花よりうぐひす
戯まじりにかの書にめでたき花どころまたは
そのさかりなるを選び出すべきなり
わが屋敷にも不の花をうゑおきあり

女郎花とうたうたるは男山ふもとの
ところへは　日本　なるこの孫人やはたはなほうの女郎花
より初人の名にめでたきゆゑ所にて一年の
こと　上　歩　なほめでたき女郎花ぐさ
こゝろあるやうにんが郎とうげつむの名にれ
むと笑うにんは歌のうるを花見はらそ
ちれ新世の例を海とあるべきやなりも海

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]や女[illegible]
八幡宮へ参すれば何といまる八幡宮へ
参りらぬとやび射てみとの者ども
八幡宮への御道ちうへ申ひへ
賞く有難りろ霊地ろか山下れ人家
[illegible]和光の[illegible]
うふ鱗ふぎふいけを[illegible]

[illegible]
道のお[illegible]ちは八月廿の日神社の事
[illegible]久[illegible]の月社の
男山くさや[illegible]
ひく日ひふの石清水ぐ若の[illegible]
つやぐの[illegible]
さむ形ぐ法乃神宮寺ありるる[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
女はらば男はら女腹にしてかの兄弟の間
[illegible]
の人[illegible]
女[illegible]人男ら[illegible]人情[illegible]の頼風と
[illegible]
[illegible]
[illegible]

秋の風うら吹き葛のその葉ゆ[illegible]
妹背乃波清めし女郎花[illegible]
[illegible]
[illegible]

迎えて立たれたれば花嫁と為りきりて
てばかりのうれしさの花又立のけはと
のおとこ　家にとりあつまりて男山の若
をかりあつまりて部屋の一間をぐるりと書き水
筆の流れ世まとかつやかつ頼風を所に
彼義をとりぶ言葉やかられたよ
なるかの池と流れ流れ流れと流れ
わかれそうぶ流れ流れ流れ世にあまりて同
し道にかんらんぶ流れてこの流れよりを
かけて芸に中にうめよりの嫁に対
て又男山ぶりかりぶ嫁に見立我まわり
からまりぶ流れぶ流れ流れ流れ
てぶ流へ　あら開家　立屋　邪婦の
悪鬼ハ方をめぐ立合れ道と流

しら銀の山のごとくにて立てり八ちんてらのう
ぶ屋てんのうの宮ハ銀ら金ものとらんとて蜘蛛
ら蜘蛛こハそもいたりおそろしや銀の枝の
あつまりてゐるごとく蛇のごとく果をやよ
かうの花の一河とぞ孫と美ておこなへ
寿れ蓋屋花のえんよ孫へくうひ孫へ蛇
とうう毒くうひ孫へ

鞠

是ら法要一見の僧ありそは我未都を見
ものの行ものに今都へ上りは未思ふ都ら花
ちうへ雲とりひ孫とわうり山とふ
雲も同し一見よ雲も知れ一見ハ久都
と重ひ孫のクアとうう孫那ら乃宿
の花も重ねて都に入くまにうり

[illegible]
[illegible]
[illegible]

おくもおくうに堀くちとは深き所を射殺
あらはらもおやさえ家とはいつくとあう
めされていえ さんはひはとんあらはと
象河原の院とうやは されはそ河原の
院うそ堀竈の浦ひよ 澄奥れちの堀竈
と称されう 称の門芝海をあまは 称よ
流河原れ流の河水ととあ流のうも

ふ家堀竈の浦人あふ堀くちあやとあ
さあうや 実澄奥のちれ堀竈と称の
内に称されうとそれなひ 和あまとのは
歌うはのは さんはあまとそ歌うはのよ
歌乃はうあはあとうやまは酒家乃
遊舞さ海くあり一あ底月うそ出て出
実月芝出くはうや面はやあの歌はの

森の梢よりぬけ出て、物りてぬけは物ゝ[illegible]ま
ても、孤舟の物ゝ上をぬけ出て、[illegible]
[illegible]こゝの面前に[illegible]きと[illegible]
加[illegible]
[illegible]
[illegible]門[illegible]
[illegible]
[illegible]

波のうれ浦よりのぞ円海に潮と海也
家ゆく塩と成りぬ也つゝ生れ出れ後と
志ぬ也ぞ後ハ相續して数ゆくものぞ
ハ潮ら其まゝひなもの円くぬ也ぞ
らひ海り水ハ面のあり此れ海ハ数
数ゆく松浦の原ぞ海く煙乃風ゆく
ぞ海れ乃ゆりされ海ゆ安ゆも。 聖

さて煙ゆ塩竈の浦ぞひくしゆえ
わ海ゆ白く者ゆく海ゆ海ゆ海ゆ 円ト 実ゆ
ゆ海ハ月のゆえて海塩竈乃浦ぞひく
ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ
ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ
ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ
ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ海ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]の私法に明月に[illegible]
[illegible]
[illegible]の神の[illegible]三[illegible]
[illegible]中に新月のうらに[illegible]
[illegible]
やうを思ひすてし神[illegible]さうや樹の枝に
[illegible]
光を[illegible]散て[illegible]家[illegible]
[illegible]
乃流のひの面白[illegible]
[illegible]
[illegible]の神[illegible]あり面白[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]中に[illegible]の

[illegible]
[illegible]新[illegible]
[illegible]
[illegible]

右下條諸者往々板
行雖多言違章誤難
計勝今亦
不足當流
秘密之加
柏子令改正者也

元禄二歳己巳初冬吉辰

日本橋南通三町目

刊行屋喜兵衛